

國學院大學學術情報リポジトリ

〔学生懸賞論文発表〕 応募状況と選考過程、選評

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院雑誌編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/666

学生懸賞論文発表

令和二年度学生懸賞論文の 応募状況と選考過程

國學院雜誌編集委員会

第一部門 (本学文学部・神道文化学部学生、別科在籍者)
なし

第二部門 (本学大学院文学研究科・専攻科在籍者)

入選 〓 本誌第一二二巻第九号掲載 〓

三田 加奈 (文学研究科博士課程後期三年)

『駿河清重 伊達紙子笈捨松』における伝説の再生

— 奥州白石断と常陸坊海尊 —

佳作 〓 本誌第一二二巻第二号掲載 〓

齋藤 樹里 (文学研究科博士課程後期三年)

齋藤緑雨「かくれんぼ」論—〈芝居〉という装置—

(所属・学年は、応募当時)

本年度の学生懸賞論文の審査対象論文数は、文学部・神道文化学部学生、別科在籍者を対象とする第一部門は応募一本、新たに大学院文学研究科・専攻科在籍者の本誌掲載済み論文を対象とすることになった第二部門は五本であった。

選考過程で基準としているのは、表題と内容の整合性、オリジナリティ、問題提起が明瞭であるか否か、結論と照応しているか、論文中の学術上の述語の定義は適切か否か、論証過程に破綻がないか、当該課題の研究史が十分に踏まえられているか、日本語の表現は適切か、などであった。また、第二部門については、本誌掲載までの審査状況についても精査している。応募する際には、上記の点に留意してほしい。今後さらに、学生懸賞論文の意義を周知し、意欲的な研究成果が数多く懸賞論文の審査対象となることを期待したい。

なお、五月十二日に開催された國學院雜誌編集委員会において、査読の結果をふまえて厳正に審査した結果、対象論文一本を入選、一本を佳作とした。

選評

三田 加奈（文学研究科博士課程後期三年Ⅱ令和二年度）

『駿河清重 伊達紙子笈捨松』における伝説の再生

— 奥州白石斬と常陸坊海尊 —

三田論文はまず、翻刻もなく作品研究もほぼ始められていない、鳥居清経（作・画）の黄表紙『駿河清重 伊達紙子笈捨松』（安永五「一七七六」年）に注目し、そこから伝承文学的考察を展開したことが評価されると考える。『駿河清重 伊達紙子笈捨松』は義経戦没後の奥州藤原氏と鎌倉方との攻防を主とした鎌倉時代の奥州合戦に際し、義経の命を奪った藤原泰衡とその臣・金剛秀綱を主の仇と目指す武士・駿河清重と、金剛秀綱を父の仇とする娘が協力し、仇を討つという筋書きである。

史実の奥州合戦に、義経の雑色として『義経記』や幸若舞「清重」に記されるものの、実在がややふやな駿河清重を登場させ、さらに江戸で評判となった、享保年間に仙台藩で起きたとされる、父を無体に切り捨てた侍に対する百姓の姉妹の敵討ち事件「奥州白石斬」とを併せ、さらにその両者を手助けするのが義

経の郎党でありながら衣川で逃走した後、不老不死を得た残夢（「常陸坊海尊／清悦」）だという義経伝説を軸に、江戸の姉妹敵討ちの評判を「ない交ぜ」にして紡がれた物語といえる。

三田論文では駿河清重が江戸初期に徳川光圀の源氏顕彰活動の一環として鎌倉の義経笈捨松伝説に組み入れられていたことを指摘し、「奥州白石斬」の江戸での広まりを確認して、同作が同時代の伝説や風聞に根差していると論証している。しかし、同稿が示唆する点はそれに留まらない。三田論文は同作に登場する不老不死の怪僧・残夢／常陸坊海尊／清悦が「不老不死で弱者の味方」というキャラクターとして確立して、由井正雪や天草四郎の援助者となっていることを挙げ、「江戸の庶民の娯楽に取り込まれて」文芸・芸能で再創造されるキャラクターと変化していつていることを指摘している。この視点は、伝説と文芸・芸能をつなぎ、その射程を現代のエンターテインメントまで通底するはずだ。

ただ一点、論文題名が禁欲的すぎるのではないだろうか。伝説のみならず、文芸・芸能・エンターテインメントのありようにまで届く論文であることを示す題名であれば、目次で関心ある読者を引き寄せられるはずだ。

齋藤 樹里 (文学研究科博士課程後期三年Ⅱ令和二年年度)
齋藤緑雨「かくれんぼ」論——〈芝居〉という装置——

齋藤緑雨の「かくれんぼ」は研究史において、音や意味の類似によって紡がれる言葉の多様性・豊饒性が、平板な言文一致の捨象していったものであると説かれ、引用や掛詞、縁語、地口に満ちた緻密な文体による戯作性が反近代的と称揚される場合も、描かれる内容・人物が類型的で前近代的と批判される場合も、「個人」や「心理」は描かれなさとされ、近代性が評価されることはほとんどなかった。

齋藤樹里氏は「かくれんぼ」における〈芝居〉の引用の精査によって、物語内容の類型からの遊離を丹念に掘り起こし、主人公・俊雄が自らを準える〈芝居〉と、他者が「皮肉」な眼差しで彼を準える〈芝居〉との乖離から「個人」や「心理」の描写が試みられている、との新見解を提示した。「俊雄君閣下」などの殷勤無礼な呼称にみる「皮肉」や、主人公が自らを「江戸一番の伊達男の末裔」と見做す「滑稽」に、近世戯作の「うがち」や「ちゃかし」との距離を認めることは難しい。「生」のイメージと自らを結び付けようとする主人公・俊雄に近代の「心理」を指摘するのも妥当ではないかもしれない。他者の「心

理」を読み違え、コミュニケーション不全のただなかで自身の内面をも捉え損ねて激しく懊悩する『浮雲』主人公・文三の刻々と変容する「心理」の圧倒的なりアリティの前で、それはいかにも浅薄であろう。

しかし、物語内容の異なる様々な〈芝居〉の登場人物と「かくれんぼ」の登場人物の状況や境遇を重ねて本歌取りの表現の重層化を図る本作の特徴を多岐にわたって指摘するばかりでなく、様々な〈芝居〉をプリコラージュして積み重ねた本作のイメージがむしろ元の〈芝居〉の類型との落差を生むと精緻な検討をもって説く本論考は、他者による評価が示す「死」と、自己認識である「生」との狭間に在る主人公の人生は実はどちらにも合致せず、主人公を類型から解放し得たと結論する。「個人」の表現は、その「心理」を精細に描写する方法以外に探りえなかつたわけではない。「個人」を描く近代性を「かくれんぼ」に認める視点は有効であろう。よって、本論考は『國學院雜誌』学生懸賞論文における佳作評価に値する。

物語内容の類型からの遊離を丹念に検証した本論考の功績は称えるべきだが、その基礎作業としての本作における〈芝居〉の引用の指摘や丁寧な解説もその労を多とすべきである。よって、吉田精一氏の注釈や宗像和重氏の校注などが既に〈芝居〉

の引用として指摘したものと本稿で新たに指摘したものと境界を明確にする注などがあれば、反証可能性が担保されることになる。